



豊橋市美術博物館友の会だより

-2009年-夏号 Vol. 72
FU風伯HAKU
Summer 2009

豊橋の仏典

5月26日[火]～6月21日[日] 会場◎2階第2・3展示室

本展では豊橋市内に残る中世・近世の仏典を紹介します。

全久院には「正法眼蔵」「宝慶記」「羅漢供養式稿本残巻」の重要文化財3点があり、いずれも曹洞宗の開祖道元やその弟子懐奘の筆による貴重なものです。東観音寺には源頼朝が熊野本宮へ奉納した四部経のひとつとされる紺紙金字「観音経」が残されています。また、石巻神社の「大般若経」は三河・遠州の様々な身分・性別の人々が作成などにかかわっており、当地方の中世の信仰を考える上で興味深いものです。江戸時代の資料としては、当地を治めていた大名家である池田家・小笠原家から大岩寺・臨濟寺に寄進された経典を展示します。



「正法眼蔵」道元・懐奘筆 鎌倉時代 全久院蔵(重要文化財)



「観音経」平安～鎌倉時代 東観音寺蔵(市指定有形文化財)

マンチェスター発、全国にさがけ豊橋で日本初公開!

開館30周年記念展 ターナーから印象派へ —光の中の情景—

7月3日[金]～8月16日[日] ※7月20日[祝]は開館、21日[火]は休館

夜間開館 7月24・31日、8月7・14日の金曜日は午後8時まで

イギリスの画家ターナー (1775-1851)は、自然の驚異やそれらと対峙する人間をモチーフに、ロマン主義的でドラマティックな風景画を描いたことで知られます。光や大気の瞬間的な変化を鮮やかな色彩とすばやい筆致で描きとめ、19世紀のイギリスで〈風景画〉をゆるぎないジャンルとして確立させました。やがてそれはフランス印象主義へと引継がれていくことになります。

本展では、ターナー、コンスタブルなどイギリスの巨匠からブーダン、ピサロなどフランス印象派まで、約100点の風景画を紹介しします。その大半が日本初公開となります。



「ルーヴシエンスの村道」カミーユ・ピサロ 1871年
マンチェスター市立美術館蔵



「エーレンブライトシュタイン」J.M.W.ターナー 1832年
ペリ美術館蔵

◎記念講演会

7/11(土)午後2時～

「ターナーとイギリス風景画の魅力」潮江宏三(京都市立芸術大学学長)

7/25(土)午後2時～

「英国絵画と日本の水彩画」金原宏行(豊橋市美術博物館館長)

◎ミニコンサート

7/24(金)午後6時～「光あふれる英国風景へのいざない」

演奏:ムースタジオ(大竹広治/ヴァイオリン、鈴木雅子/キーボード)

8/1(土)午後2時～「作曲家・鈴木直己 音の展覧会～音楽で彩られた絵画たち～」

演奏:鈴木直己(シンセサイザー)

◎ギャラリートーク

7/15(水)、7/18(土)、8/2(日)午後2時～ 7/31(金)、8/7(金)午後6時～

六十余州名所図会展

開催中～6月7日[日]

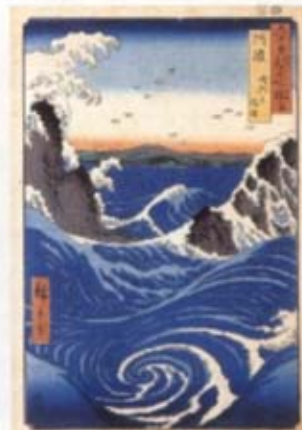
「六十余州名所図会」は、畿内七道の68か国に「江戸」を加え、さらに目録を付した計70枚からなるシリーズです。制作年代は、嘉永6年(1853)7月から安政3年(1856)5月にかけてであり、広重晩年の「江戸名所百景」にならぶ風景版画の秀作です。

広重は、住み慣れた武蔵・江戸のほか、甲斐・安房・下総などへ旅したことが知られ、旅先でのスケッチを基に作画したであろうことが想像されます。しかし、広重の足跡は全国に及んでいないので、本シリーズの多くは「山水奇観」「摂津名所図会」「日本山海名産図会」「東海道名所図会」「伊勢参宮名所図会」「巖島図会」などの名所図会や、「北斎漫画」のような絵手本などを種本として利用したと考えられています。

ところが、ただ単に原図を剽窃しただけではなく、横絵を縦絵にするため、絵師の視点を鳥瞰図風にとらえ直したり、構図のうち近景をデフォルメするなど独自のスタイルを採用し、絵を再構成しています。広重の力量が発揮された作品であると評価できます。広重の代表作には、雨・雪・霧といった日本の季節や風土を作品に溶け込ませていることが特徴ですが、本作品にもいかに発揮されています。



周防



阿波

新収蔵品展

6月13日[土]～7月12日[日]

平成19・20年度に新たに収蔵された資料を公開します。歌川広重の初期の代表作である「行書東海道」や「隸書東海道」の東海道の風景、徳川14代將軍家茂の上洛を題材とした浮世絵版画、岡本太郎の父である岡本一平らが大正期に東海道を旅して制作した「東海道五十三次漫画絵巻」などを紹介します。

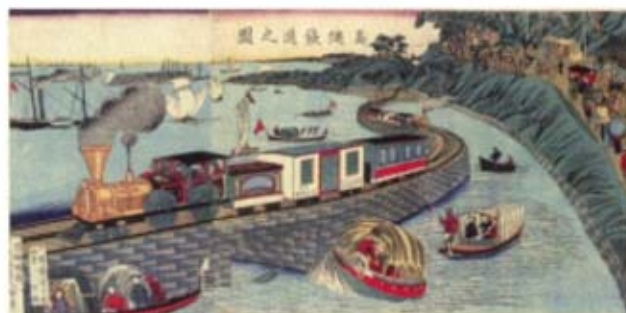


東海道五十三次漫画絵巻

鉄道開通 一列車に乗って東へ西へ

7月18日[土]～8月30日[日] ※7月20日[祝]は開館、21日[火]は休館

明治5年、新橋～横浜間に鉄道が開通すると鉄道網は全国に拡大され、明治22年には東海道本線が開通し、陸上交通の主役となりました。この展覧会では、新橋～横浜間の鉄道開設、豊橋に設置された豊橋駅・二川駅、人や物を運ぶ物流の中心となった鉄道や旅行の様子を、明治・大正・昭和各時代の東海道本線を中心に、錦絵や古写真、絵図、鳥瞰図、時刻表・切符等鉄道関連資料により紹介します。



「高輪鉄道之図」月岡芳年



「東海名所改正道中記 新橋」三代歌川広重

友の会は目指す道に向かってどのように取り組むべきか

市が建物を造り、作品を収集し、時々それを市民が観に行く。それが美術博物館本来のあり方なのだろうか。友の会はそこにどんな関わりを持ち、役割を果たすことができるのだろうか。シリーズ4回目となる今回は、友の会の今後のあり方について役員と学芸員で話し合いました。

●3回シリーズを通しての感想は？

「作品を展示して、来た方に観ていただくのが美術館のイメージでしたが、作品をより深く理解できるワークショップのようなことを友の会でできたら、市民の方にもっと美術館を身近に感じていただけるかなと考えようになりました。」

「美術博物館ができて30年。友の会発足から22年。私たち当時会員になった者も、年齢が上がってきています。館が開館した時のようなインパクトが、若い方たちにとってないのも事実です。豊橋からいい作家や美術意識を高めた若い人たちが輩出するよう、館が牽引役になればと思いました。」

「座談会を重ね、美術博物館が色々なことの牽引役であるべきだと強く感じました。社会の仕組みとして、芸術を楽しむとか鑑賞することが、教育や社会の役に立つことと密接には関連づけられていない。美術博物館の存在が、小学生から多感な中学生や高校生、さらに市民たちを巻き込む発信装置として十分に機能していない。これが一番の問題であり、テーマであろうと思います。」

学芸員「先回のゲストの鈴木敏春さんは、老人の認知症対策に施設のスタッフと取り組んだり、子どもたちの情操教育を共に考えたり、世の中の役に立つ美術であるべきだと言われたのが印象的でした。館のサポーターである友の会と協力して、居心地よく滞在を楽しめる場所づくりを少しずつでも進めたいですね。」

●友の会の存在、または活動についてどのように思われますか？

「メリットがあればこそその友の会、という視点だけでは寂しいです。美術博物館を応援するボランティアの会という意識を若い人たちに継承し、会の活動を通して自分を活性化できるんだと伝えたいと思います。」

「会員が労力を提供し合って成り立つ会ですが、それぞれに時間的な制約もあります。仲間の存在は、活動のエネルギーの基になっています。」

「美術博物館は、格のあるギャラリーとしても利用がさかんですが、利用団体や展示会を観られる方々にも友の会のお仲間になっていただきたいですね。」

「未来へつなげるために、子どもたちへの視点が欲しいです。美術は誰もが楽しめるものなので、幅広い世代の会員を獲得したいです。また、美術愛好家でも友の会を知らない方があるようにも思います。日頃の活動に関しては、とても有意義で楽しんでいます。」

「友の会がなかったら、と考えると存在価値がよくわかります。会員だからこそ、企画展や常設展を観る機会が多くなり、美術好きになったり、好きな作品や作家を見出すこともあるでしょう。また、友の会がなければこの「風伯」や研修旅行もないわけですから、美術博物館を中心とした人とのつながりもなく、文化的な楽しみも発展していきません。毎年、館の中で音楽を聴くという企画も、会員の皆さんに楽しんでいただいていると思います。」

「芸術と出会うと、生きる上での意欲が膨らんで、親た人の幸せにつながっていくという思いが友の会の活動の一番大きな源です。」

学芸員「閉館後にコンサートを開催することができるようになり、それを牽引したのが友の会で、美術博物館活動の幅を広げていただいたと感じています。イベントや講座・研修旅行と、盛りだくさんの事業があり、こ



座談会風景

れほど活発な友の会は他の美術館では聞きません。また、年4回の会報発行は情報をタイムリーに提供するのによい回数です。館報の代わりという認識もあり、サポートしていただいていると感じています。」

●これからの友の会の活動に何を期待しますか？

「造形パラダイス以外にも豊橋公園で行われるたくさんのイベントがあります。日程を合わせて友の会として情報発信をすれば、多くの方にアピールできるし、企画があれば参加していただけるでしょう。」

「市民ギャラリー利用の団体とも連携しながら、友の会の組織力をアップすることも実現可能ですね。」

学芸員「たとえば動物園や図書館とタイアップできたら面白いですね。来館者の層も広がるでしょう。他のジャンルや組織とどんなふうにコラボレーションできるか、チャレンジする楽しみがあると思います。」

「開館30周年を記念して、11月3日には、美術博物館と友の会が共催する真野響子さんを招いてのシンポジウムが決定しました。準備やPRをしっかりと、大勢の方に参加していただきましょう。内容の結果報告を出すなど、次に続く形で気運を盛り上げましょう。」

学芸員「シンポジウムは〈魅力ある美術館とは〉というテーマですので、友の会の皆さんにとっても大変興味深いものだと思います。」

「来館者に世代的な偏りがあるならば、層の薄い若い世代に対して集中的に魅力ある企画をする必要があると思います。昨年館が行った絵本作家のスズキコージさんのワークショップが、子どもたちには美術に親しむ良いきっかけになったと思います。そうした企画を継続していけば、子育て世代を取り込めるのではないのでしょうか。必要なら専門家を招いて行えばいいと思います。」

「美しいものへのあこがれやこだわり、鑑賞の仕方や美への観点など、人と芸術の関わりを自然に組み立てて、身に付けていけるようなワークショップを開催したり、豊橋を舞台とした独自のメソッドを確立する必要がありますね。」

「小学校1、2年生の図画工作の教科書を見ると、遊びから入っています。子どもたちの元気な動きと一緒に進んでいるんですね。行動しながら美術を楽しむよう

な、体験・体感する視点での企画を友の会がお手伝いするのはどうですか。」

学芸員「情動的な教育が必要ですね。学校でできないことを美術館とか博物館でやるというのは、重要だと思います。」

「年度替わりにしっかり会員更新がされるような働きかけが重要です。会員拡大についても、現会員や理事の皆さんに入会のお誘いをさせていただくのが一番効果的です。年度初めの企画展の際に友の会デスクを出して勧誘活動を行うのもいいですね。20代、30代、40代の若手の理事を増やして、そのお仲間にも会員になっていただく。また、市の職員にももっと会員になっていただきたいと思います。」

「会員には、喫茶コーナーや美術博物館のグッズを買った時に割引があるとか、細かい特典を増やしていくと、入会するきっかけになるのではないのでしょうか。」

「瑞々しい感性、新たな発想と企画力のある若手と経験豊富なベテランの組み合わせで、美術博物館を応援する仲間を増やしましょう。今までトライしてこなかった斬新な企画・事業を考え、友の会を盛り上げ、豊橋の文化に貢献していきたいですね。」

学芸員「友の会は自由で活発な活動ができる団体だと思います。600名もの会員の、人のつながりやエネルギーを活かし、幅広いニーズに応える企画を用意して、どなたでも参加しやすくすることが友の会や美術博物館のパワーアップにつながると思います。」

「友の会」が果たすべき役割は確かにある。しかしそれを行動に移し、思いを実現させる志とエネルギーが「友の会」にあるのだろうか。そのように行動することを、会員や地域社会から本当に期待されているのだろうか。

次のシリーズは友の会の思いと行動の実際について取り上げていきます。どうぞご意見をお寄せ下さい。

(風伯編集部)

—土曜美術サロンに参加して—

友から友へ

Members to Members

コレクションは一つの個性

木崎和郎(3086)

美術が好きで、今回の3回の講座にはすべてに参加させていただきました。第1回のテーマは、「なぜ人はものを集めるのか」。金原館長によれば、「人は、ものを残したい、集めたいという欲望を本能的に持っている。この欲望がものを創造する原点にも、収集の源泉にもなる」のだそうです。

縄文時代に人間はまず土器を作ったということ(土器は用の美でもある)や、呪術や祈りのために洞窟に牛の群れを描き、それが人間の生きた証として残されているフランス・ラスコーの壁画のお話をされ、美には“願い”が込められており、「作品の収集」もじつは願いの発展形態であり、それ自体も個性的な創造的なものである」と言われました。かつて人間国宝の芹沢銈介(型染め作家)が、大原美術館で自分のコレクションを展示した際につけた展覧会名は、「もう一つの創造」であったそうです。

美術への関心とそれ相応の財力があれば、作品収集ができるのではないかと思っていました。しかし、優れたコレクターにはほかにも、並々ならぬ情熱や努力、他のコレクターへの強いライバル意識、そして何より良きアドバイザーが必要であるということを知りました。

日本最初の私立美術館である大倉集古館(東京)を設立し

た大倉喜八郎や、三溪園(横浜)の原富太郎(雅号:三溪)、大原美術館(岡山)の大原孫三郎などがその例として挙げられました。彼らは美術品を収集するだけでなく、横山大観や下村観山など画家たちのパトロンとして援助を行い、それによって多くの名作が生まれ、日本美術の一端を担ってきたというお話も印象深いものでした。

この講座に先立ち、川端康成のコレクション展を名古屋で鑑賞しました。ロダン、雪舟、一休、光悦、東山魁夷の書画、埴輪、漆工芸、彫刻など幅広いジャンルの一流品を拝見しました。今回の講座を聞いて、川端康成もまた審美眼の優れたコレクターであったのだと実感したしだいです。



講師の金原宏行館長

ニセモノ? ホンモノ?

鈴木 孟(595)

友の会の美術サロンに初めて出席させていただいた新米会員です。仕事オンリーの狭い人生(稼ぐ人生)を終わってから、地域社会への参加、健康スポーツの開始、月例法話会への出席など、生活の幅を広げてまいりました。そしてこの頃になって、もともと好きでもあった書や絵画にも目を向けてみようかと思っての、この会への参加でした。“美術のおもしろさを深める”というこの企画は、こんな私にとって、びったりの講座だと思いました。

以前にも、あいた時間には美術館にも行きました。自分の気に入った絵、自分の心に響いた絵を楽しみ鑑賞する。有名作家の作品でなくとも、心に入って来るものなら、ニセモノであっても、絵としてはホンモノか、などとも考えながら……。

今回、金原館長さんの話を聞いて、そう言えば、私は美術館等に展示されている作品を贋物かな、などと思ったことは一度もありませんでした。それを裏づけてくれる館長さんや、芸員の大変さが分かる気がしました。

モレルリの法式で、耳、指、爪など細部の描写について、通常画家は同じ型、様式で書き分ける、という話がありました。画家は単にモデルを描き写すだけでなく、一度自分の心に入れてから、描いているのだと感じられました。だからまた、同一モデルでも画家によって、作品は全く別人のように感じられ

るのか。画家が心で捕えての作品でないと、量感や質感が見えないのは、当然かも知れないとも思いました。

骨董屋からの「掘り出し物」に眼がくらみ、以後、そのまま一生を終わった作者の話もありました。絵を見ることを忘れて、お金を見続けることに捕われてしまった為でしょうか、それでは淋しいです。

ニセモノ・ホンモノの楽しみは“なんでも鑑定団”程度にして、やはり自分の好きなもの、心にジンと響いたものをじっくり鑑賞し、楽しんでゆきたいと思っています。



講座風景 三の丸会館にて

こんにちは よろしく!

この春、新たに美術博物館に加わったスタッフをご紹介します。



- ①氏名・所属 井上三男・事務長補佐
 ②趣味 スポーツ観戦、旅行
 ③好きな芸術家等 特に好きな芸術家というのはいませんが、(随分昔の話となりますが…)以前、美術博物館で開催された「いわさきちひろ展」が強く印象に残っております。
 ④友の会へ一言 4月の人事異動により環境部施設課(資源化センター)から赴任しました。配属されて1ヶ月あまりがたちましたが、市民の皆さんの文化・芸術に対する関心の高さ、熱心さには正直驚いております。また、職員の仕事に対する熱意と前向きな姿勢にも感心しております。私も、1日も早く美術博物館のスタッフの一員であると胸をはれるようにがんばりたいと思いますのでよろしくお願い致します。



- ①氏名・所属 松本泰典・埋蔵文化財担当嘱託員
 ②趣味 スポーツ観戦(野球)
 ③好きな芸術家等 ドヴォルザーク
 管弦楽に携わっていたのでクラシックは全般に好きです。
 ④友の会へ一言 今年度より、豊橋市の埋蔵文化財のお仕事に携わることになりました。豊橋には縄文時代の遺跡が多く、大学生の頃から高山の蛇穴など豊橋の遺跡めぐりをしていました。それでもわからない点が多々ありますので、日々勉強の毎日です。よろしくお願いいたします。



- ①氏名・所属 長崎千明・埋蔵文化財担当嘱託員
 ②趣味 ガーデニング、音楽鑑賞(テクノ、ジャズ)
 ③好きな芸術家等 熊谷守一、また陶磁器全般に興味があります。
 ④友の会へ一言 今年度より、牟呂町坂津地区の遺跡発掘調査を担当させていただくことになりました。埋蔵文化財を最大限に活用するためにはどうすれば良いのかと頭を悩ませながら、勉強、勉強の毎日をごしております。牟呂町近辺にお越しの際は調査現場に気軽に足をお運びください。よろしくお願いいたします。

※これまでお世話になった牧野哲也さん(前事務長補佐→広報広聴課課長補佐)、荻谷史徳さん(前埋蔵文化財担当嘱託員→東京都新宿区の埋蔵文化財担当)、西松賢一郎さん(前埋蔵文化財担当嘱託員→大口町教育委員会)、どうもありがとうございました。

〈予告〉美博の開館30周年記念シンポジウム

美術に造詣が深く、金沢大学の非常勤講師を務める女優の真野響子さんに講演いただき、そのあと〈魅力ある美術館とは〉をテーマに飯田・浜松・豊橋の美術館の各館長等によるパネルディスカッションを行います。友の会も共催し、会員の優先席も用意する予定です。詳細は次号風伯(8/20発行)でお知らせいたします。

◎シンポジウム 日時:11月3日(火) 午後1時～ 場所:豊橋市公会堂

ホームページをリニューアルしました!

友の会ホームページをリニューアルし、「風伯」も71号まで掲載しています。ぜひご覧ください。

アドレス <http://www.museum-toyohashi.jp>

会員の更更新手続きをお願いします。

未更新の方に振替用紙を同封させていただきました。お早めに更新をお願いいたします。

収蔵品紹介

[黒石寺四天王]

大森運夫 ● OMORI Kazuo

1995年 四曲一隻 165.0cm×335.2cm
平成20年度大森運夫氏より寄贈

大森運夫は労働者の姿をはじめ、モロッコ情景、民俗芸能や祭など、一貫して人間をみつめ、その姿を描き続けてきた作家である。1980年代半ばより人間の業を象徴したかのような浄瑠璃人形を主題にするが、その一方で「人形＝ひとがた」への関心を仏像にも向けるようになった。当初その対象は滋賀や奈良、広島などで取材した破



損仏であり、90年代に浄瑠璃人形と並行してしばしば仏の姿を描いている。時を経て(あるいは廃仏毀釈によって)、着彩や装飾のみならず、腕や光背が欠損し、目鼻立ちすら定かでなくなった仏たちの様子は、土蔵の中で見出した古い浄瑠璃人形と同様のインスピレーションと、描きたいという欲求を作家に与えたようだ。

黒石寺は岩手県奥州市にある古刹で、主題となった四天王(重要文化財)は本尊の薬師如来と同時期(平安初期)のものとされ、ここでは向かって右より持国天、広目天、増長天、多聞天を描く。彩色の剥落こそあるが、ほぼ完全なフォルムで威容を示しており、破損仏にみるような無常観は感じられない。大森は浄瑠璃人形とはまた違った力強く重厚感ある筆致で、この仏像の持つ迫力を伝えている。

本作品は昨年度、作者本人より10点の一括寄贈を受けたう

ちの1点であり、寄贈作品のなかには同時代の千手観音像を描いた《影向(ようごう)》もあるが、こちらは腕が半ば失われた破損仏である。近年は初期に取り組んだロマネスク彫刻に再び向き合い、プリミティブで力強いさまざまな形象の人物彫刻を描いている。しかし、対象が仏像であれキリスト教彫刻であれ、いずれも描こうとしたものは宗教的世界観を象徴する仏画やイコンではなく、あくまでも折りの対象としての「人形(ひとがた)」であり、人々の想いなのである。

5月26日より開催の「豊橋の仏典」にあわせて常設展示室では「仏を造る、仏を描く」をテーマに、田中桂一、高畑郁子、杉本健吉らの作品を紹介する。大森作品はこの《黒石寺四天王》のほか、《影向》《燈影》の3点を出品する予定である(6月21日まで)。

(豊橋市美術博物館 丸地加奈子)

編集後記

芸術に触れなくても、生きていくうえに困る事はないけれど、心が揺さぶられることもなしに生きていくのは寂しい。小学生の時の写生は記憶にあるが、感動する絵画や芸術作品に触れた記憶はない。鑑賞の仕方や作品の解説を聞いた覚えもない。パリのルーブル美術館で小学生たちが先生に連れられて、教科書に載っていた本物の絵の前で説明を受けている場面に出会ったことがあった。学校で教わったのは試験のための知識としての美術だったのだ。感性を育てる教育も必要だった。美術を知識としてのみ教えられて来た。人はなぜ絵を描き、芸術を生み出さなければならなかったのかを考え、本物に触れてきたら、今とは違った世界が見えていたのかも知れないと、今にして思う。

(鈴木伊能勢)

【表紙作品】

エリザベス・アデラ・フォープス(ジャン、ジャンヌ、ジャンネット)
1891年 油彩・カンヴァス 55.6cm×44.4cm
マンチェスター市立美術館蔵
「ターナーから印象派へー光の中の情景」展より

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第72号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会
会長 原文成
担当副会長 宮田正人
編集長 鈴木伊能勢
編集委員 神野能生子 福島陽子 山崎恵子
協力 豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882
平成21年5月20日発行(5月・8月・11月・2月各20日発行)
平成10年3月17日 第3種郵便物認可 定価200円
※会員は会費に含みます。※定価には消費税が含まれます。